

X-52

148
3711

興版
行權
權
所
有

繪 姉
本 妹
巖 達
流 大
島 礎

演
劇
脚
本

全
壹
冊

088389-000-6

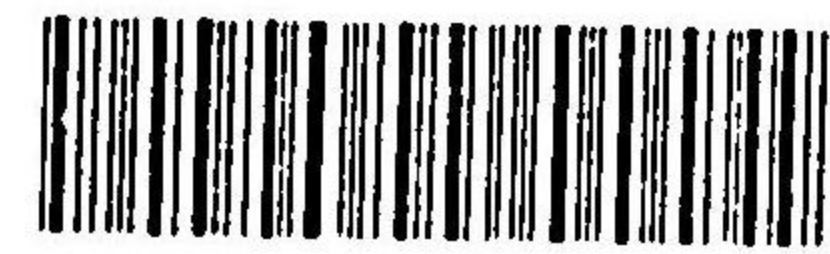
特52-610

姉妹達大礎・絵本巖流島

並木 五瓶/著

M27

DBJ-0015



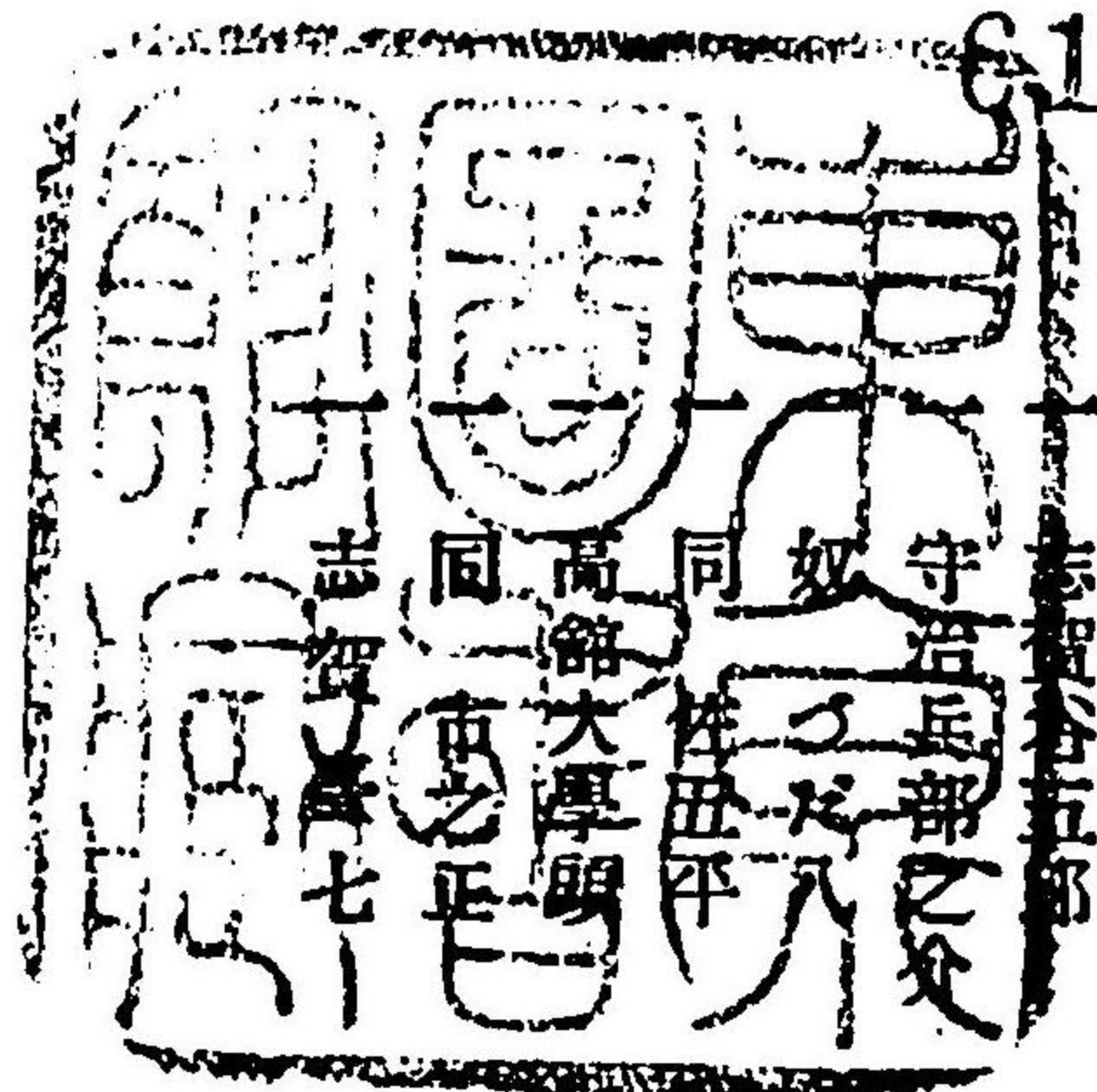
特52

610

姉妹達大礎

序幕

貳幕目 高館の場



造り物三間の間二重向ふ襖上手床の間爰に摩利支天の掛物を掛供物を備へ平舞臺櫻の立木
 二重能所に礎崎襪形りにて長文を讀て居る姉四人下手に住居合方にて幕明くと(礎)あす見

- 一 礎ざき
- 一 左五平女房お力
- 一 宮城野
- 一 腰元 梢
- 一 同 楓
- 一 同 お濱
- 一 同 千草
- 一 申上升
- 一 乗物昇
- 一 近習大勢い



んと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹ぬ物かわ○庭に盛りのアノ花の雪と見紛ふ花吹雪ト文を見
 ○道ならぬ此文は正敷ふ○心ならぬ事じやナ(梢)申奥様櫻の散りしをお心に掛られぬが宜
 敷ムり升る(楓)朝の間に櫻の散とは替つた事じやのふト爰へ下部出て(下部)ハ、申上り升
 五郎様が参りしと告ては入程無橋掛りより谷五郎出て(谷)ホ、磯崎殿(磯)お通り被下升
 ト谷五郎上手へ通る(磯)御用の筋は(谷)師匠甚内殿の義に付(磯)何ぞ氣遣ひな事はムりま
 せぬか(谷)其義は(磯)如何成事か御聞せ被成れて被下升ト床の掛物此時落る○風も吹ぬに
 落たるは(谷)武運の守り摩利支天の繪像を銚り(磯)櫻の散たも(谷)正敷○ハテ争われぬト
 バタ／＼にて奴頭陀八走り出て(頭)奥様一大事でムり升(磯)あわたた敷何事じや(頭)甚内
 様は夜前白石の藪蔭にて(磯)ヤア(頭)御最期とムり升わい(磯)ヤ、ハ、(頭)最早宮城野様
 も御歸りでムり升るト此内向ふ方家來大勢エイサツサ／＼と早打の乗物を昇出る跡方宮城
 野左五平出て(宮)母様(左)奥様(磯)甚内様の様子は聞た(左)口惜ふムり升(磯)敵は何者名
 は何と(宮左)其敵の名は(磯)何者じやわいの(左)知れませぬ(磯)コレ佐五平そち達夫婦が
 付添ひながらやみ／＼と討せ其場の様子いやいのふ(谷)左五平心を静めて子細をいやれ
 (左)ハ、様子と申升るは昨日龜割坂の嶺にて御勅使様を御見立申直さま御主人には高館へ
 お歸り拙者は旦那の御用に付二本杉迄参り途中數多の鳥が泣さわぐハテ心得ずと思ふ程心
 も空に白石の下道にて血汐に染し死骸見ればお旦那無念や御主人には事切れてあへない御

最期○其場にて手に入りし鑓の穂先銘は則志津三郎ト鑓を出す(谷)ドレ其鑓ト見て(頭)其
 穂先御存でムり升るかト詰掛て云ふ谷五郎臺七と心附思入(谷)何者の所持の鑓か(左)御存
 じは(皆々)ムり升せぬか(谷)いかにもト向ふ方成りと云ふ皆々驚き威儀を繕ひ出迎ひ
 (磯)殿様にはイザ先是へト向ふ方高館市之正若殿の拵へ着附袴羽織同大學小性附添近習此
 跡より志賀臺七着附上下にて出て(市)皆の者太義(磯)先／＼ト本舞臺二重の上へ來り並能
 住ふ(市)磯崎宮城野思ひ寄ぬ甚内が横死察しやる(大)兩人の者家中へ若殿のお形りとは冥
 加ない事な甚内は千石を頂戴する小身の甚内果報者では有わい(臺)大學様の御意の通り磯
 崎殿宮城野殿冥加ない殿の御心配おろそかに思わぬが能ムらふ(市)甚内は某が師範討て立
 退たるは常家に又向ふも同前敵の家名は何と云ふ(磯)若殿様の御意夫ト甚内を討たる敵の
 名は(大)何と云ふサア早く申せ(磯)サア其敵の名は(大)敵の名は(磯)夫はト皆々顔見合せ
 (大)知れぬかフ、ハ、ハ、武士たる者が鬪討に逢ふとは馬鹿侍ひ(臺)武士が鬪討に逢へば家
 名は立ぬ家は没収ハテ何共氣の毒千萬な(左)慥な手掛りを取らへ置升てムり升る(磯)何と
 いやる其手掛りを早ふお目に掛て(左)畏り升た只今お目に掛升る修行者は是へト乗物の戸を
 明中々宇治兵部之介出る皆々見て思入有て(兵)何れも御免ト真中へ住ふ(大)見れば六十六
 部を引連敵の手掛りとはどふいふ子細じや(左)去ば主人甚内最期の場所居合せしきやつ
 が仕業と存じ邸へ同道致し升てムり升る(大)スリヤ其六部が敵の面鉢存居るか(兵)存て居

り升る(大)シテ其敵の名は(兵)存じ升せぬ(大)紛敷一言詮義が有るぞ(兵)偽りは申さぬ敵は能存乍名は存じ升ぬ(大)名を知らぬとは(兵)御不審は御尤夜前白石の谷陰を通りし所血汐の死骸様子を問ば劔術の意恨に依て討果すといし捨て其場を立去る面躰は能覺へ置升た○佛道修行の身なれば死骸に回向致す所へ息女や御家來が欠附敵じやといわつしやる面躰を見覺へ有が手掛りと同道致てムリ升る(市)劔術の意恨と有は家中の内にも覺ゆる○斯並ぶ内に似る者は無か有ば申せ(臺)ア、イヤ、劔術の師範たる甚内を討て立退く程の者がうか、と當所に居升ふかのふ六部此敵は同家中では有まい此場に似たる者は有まいがなト吞込せる(兵)成程かふ見た所がムリ升せぬ(磯左)此場に似たる者はムリませぬか(大)六部に細打てト近習出て腕廻セト掛る(兵)何と被成(大)甚内閣討の場所には有合せ紛敷言譯細討て獄屋(引ソレ)四人ハ、ト掛るを投退け(兵)廻國修行致す宇治兵部之介政之馬鹿な事(大)スリヤ兵部之介政之か(市)扱は其方が聞及ぶ政之とな對面は今が始めて甚内横死の上は師範なくては余國の嘲り汝が武藝慕敷思ひし折柄其方我國に止つて師範と成り吳ふならば予が大慶(兵)有難き若殿の御詞諸國遍歴仕るも能主取を致ん爲掛る大國の師範と成れば武士の面目御指南仕るでムリ升ふ(市)早速の承知満足(臺)此國に足を止るとは安堵仕つた(磯)甚内討れ升た敵が知れませぬば杉本の家名は今日限り敵を尋升迄家没收の義御宥免被下襟願上升(大)叶ぬ事だ家没收は御定め只今屋敷を立退け(磯)スリヤ如何様に申

升ても(大)くどい(臺)笑止千萬御秘藏の甚内が妻子今日一日の御宥免願上奉る(市)ヲ、臺七の取なし不便にも思へ共武家の作法今日一日は予も此屋敷に有て彼等に名残の盃を遣わそう(臺)御禮を(皆)有難ふ存じ升る(市)我達へは名残りの盃き又兵部之介へは主従の盃(兵)ハツ(市)臺七には勅使見送り挨拶萬事(臺)畏つてムリ升る(大)者共扶持放されの女郎共今日中に追放致せ(市)臺七は旅館へ兵部之介奥へ來やれ(兵)御前には先(皆)入らせられ升ふト唄に成皆と遣入る臺七谷五郎兵部之介の三人跡に残る(兵)ドレ旅館へ參らふか何兵部之介目出度ふ存る奥へ同道拙者は參らふかト立上る(谷)兄者人も待被成(臺)用が有る(谷)旅館へムる事じやまで(臺)主命なれば行ずは成まい(谷)御目に掛る物がムる(臺)身共に見する物とはト懷中より穂先を(谷)兄者人覺へがムるか(臺)ドレト見て恟り○是はト兵部手を組見て居る(谷)志津三郎の鑓は新團右衛門殿の所持なれ共未だ家中に誰有て存た者は無が仕合せ左五平が持歸りト目見るト扱は敵とは兄臺七殿とは能存知罷在我こそ甚内が敵と名乗て出る心は有まい白石の藪蔭にてだまし討とは比與な振廻敵か知れぬば杉本の家名は今日只今退轉致すぞや尋常に名乗て出討れさつしやれたら志賀臺七こそ賊の侍と武名が輝き升るぞや兄者人淺間敷所存でムるよなト急度詰掛(臺)ムウ(兵)天晴器量の若者義理ある兄を重んじ家名を大切に思ふ志し義理と情を辨へなくては賊の武士とは云れまいがな(臺)誤つた(志賀の家名を退轉さすは不孝とやいはん恩知らずと弟能言て吳た是へ

参つて潔く磯崎親子に討るれば未練の名も不取志賀の家名は弟其方相續致して呉い頼置は
 是計り(谷)本心に立歸り敵と名乗て出る所存と(臺)いかにも(谷)合點が行ぬこなたの心
 に一物有とにらみ置た(臺)なんと(谷)辯舌工に此場を立退く所存有ふ(臺)ヤ(谷)ひきや
 ふ未練に逃隠れ其身を全ふ致されよ(臺)臺七が詞を疑ひ(谷)兄弟の縁も是迄(臺)若本心に
 改めて(谷)敵と名乗り潔く其時こそは(臺)元の兄弟(谷)マア夫迄は(臺)ヤ(谷)兄者人武士
 の立べき御思案被成いと歌に成穂先を持って奥へは入(臺)親の家名を穢す穢さぬは臺七が魂
 そふじやト花道へ行(兵)比興者侍(臺)何比興者とは(兵)弟をたばかり死出の用意と此場を
 去は比興の振舞(臺)劍術の意恨に依て討果し立退くは武藝の勉めたわけた事を(兵)印可を
 奪ひ立退は盜賊で有まいか(臺)サア夫は(兵)サア(兩)サア(臺)暫時の暇とれそれ
 ト行ふとする(兵)逃るとて逃そふか兵部の介が遠當の術を持って立所に一命をト身を堅め當
 に掛る臺七べつたりと成(臺)早まるまい料事せまいぞ(兵)サ印可を渡すか(臺)いやだなら
 ぬ奪し印可を渡そふかト又欠出す兵部遠當のこなし臺七立すくむ能所近寄り(兵)兵部の介
 が遠當の術こたへたか(臺)こたへた(ハ)テ補流の印可を望むは胸に一物臺七も大望有故
 まさかの時は臺七が片腕と頼む菊水の印可御身に呉たぞ(兵)いかにも惜に落手致たト請取
 (臺)渡すが互の因み(兵)追附鎌倉へ立越補流の指南と聞ば(臺)尋ね求めて(兵)其時對面
 (臺)さらばト向ふへ走りは入(兵)助置くも一ツの手立ト思入有ては入る引違へて大學出て

思案の思入爰へ磯崎左五平宮城野出て(三人)大學様(大)未立退ぬか(磯)只今若殿様のお盃
 を頂戴致し(宮)立退ねば成らぬと思は涙が顔れて夫故あなた様へのお願ひ(大)日延の願ひ
 か(磯)左様ではムりませぬ敵討御免の願ひを(大)名も知らぬ敵討の願ひ馬鹿な事を(磯)此
 儘邸を立退升ては杉本の家は一生理れ木(宮)どふぞ首尾能敵を討(左)杉本家の立升様に
 (磯)何卒お執成を(左)偏に願ひ(皆)上升る(大)かしま敷明日より袖乞致す工夫を仕おるふ
 (皆)どふ有ても(大)家名退轉に極つたわい(皆)ハア、ト泣伏す奥より(兵)杉本の家名相立
 申ぞト上下形りにて出て○劍術の意恨に依て其内を闊討になし印可を奪ひ立退曲者只今御
 詫に入若殿是へト襖開く市之正近習附出る(大)シテ印可は何者が所持する(兵)是にムるト
 出し(大)印可所持する上は(磯)夫ト甚内殿の敵は(左)宇治兵部之介(磯宮)そなたで有たな
 (谷)甚内殿の敵は兵部之介殿ではない必らず早まり召れな(四人)何者でムるな(谷)殿へお
 願ひ谷五郎めにも暇を下し置れ升ふならば有難ふ存じ升る(市)子細有げな此場の様子(兵)
 乍憚も聞濟遣れ被下升ふ(市)敵の名を申て能るふ(谷)有難ふ存升る○此穂先は甚内殿無念
 の魂此鎗の主こそ敵(左)其持主は(宮)シテ敵は(谷)外でも無志賀臺七(四人)エ、(谷)證詰
 は則ト腹へ突立様とする宮城の止て(宮)待て被下升(兵)谷五郎待て不忠に成ぞや(谷)なん
 ど(兵)武士の命はお馬前にて御用に立が忠義ならずや(谷)夫は(兵)甚内存生の内の縁組は
 いはば眞の敵で無か(兵)左様こなたが何故臺七を見通し召れた(兵)兩家が立たさ(谷)何と

(兵)此印可を奪ひ返し臺七を見遁せしは先達て亡び失たる七草の殘黨東國に配廻する由今臺七を入牢致せば敵と名乗り討半叶ず夫故助け跡にて敵は臺七とお願ひ申我所存(谷)スリヤ兄は七草へ荷擔なすと(兵)何卒彼等へ敵討御免願しふ存升る(兵)今日か當家の師範たる其方が願ひ聞届吳るぞ(大)成升せぬ(兵)成らぬとは(大)當家寶藏の鍵預りは甚内其印篤か紛失(皆)エ、(大)其科有妻子敵討などとはのぶといやつ(礎)御判出る迄拙止り升て何卒宮城野へ敵討御免の義を(市)神妙の願ひ聞届吳れる(礎)有難ふムり升る(大)谷五郎は敵臺七が弟宮ぎのと縁組は内禮事谷五郎同道は叶わぬぞ(兵)ソリヤ御了簡が違ひ升○谷五郎は只今御暇を蒙り浪人の身(左)下郎は敵討の御供願ひ上升る(礎)左五平は叶わぬ(左)エ、何故にて(礎)證詰は此艶書ト開き是を左五平讀上恠りして○コリヤおらが手跡(礎)夫じやに依て供にはやられぬ(左)ぐづら／＼言譯せふは頭陀八に逢てト行掛る爰へ頭陀八出て突廻し(頭)左五平そふ言て振るのか(左)我に逢たかつたト花道へ連て行○此間貴様に書て遣た艶書柄疑ひ請た此左五平我が頼んだ様子言わけせい(頭)何を言ふ何の事じや(左)此狀の言譯を(頭)此狀覺はない(左)知らぬと言のか(頭)我が言譯なさにおれにぬり掛る積りかト兩人せり合(頭)己れが様な奴はいつそ斯ふしてト脇差に手を掛る爰へおりき出て止る○わりやお力なせ留る(力)様子は不殘開升たみす／＼知れた此場の災難罪に取て落そふといふ工み夫に違ひはムんす舞と三人せり合兵部之助此躰を見て(兵)ハラ下様には惜き忠義の者頭

見陀八とやら目通りへ參れ(頭)チイ(兵)其方が様な者を推舉申さば御用に立そふな者先武士に取立衣服大小を拜領させ知行は如何程が能ろふぞト硯箱を引寄せ○御墨附の筆者は則兵部之介有難く頂戴致せ(頭)サるらいぞ思ひも寄ぬ立身出世エ、有難いと墨附を見て○何じや此頭陀八と申下郎主に不義放埒の科に依て縛り首に致可者○兵部之介何んで身共を馬鹿にひろぐ(兵)我は無筆ではないか(頭)ヤ(兵)無筆と成て入込しは子細無て叶わぬ其艶書是へト左五平持行(兵)扱こそ艶書の文言は左五平に認めさせ宮城野と書たはうぬが手跡で有ふ哉(頭)覺へない(兵)最早叶わぬ七草が殘黨(頭)何んど(兵)覺期致せ(頭)エ、殘念や十年來仕込し我大願能見顯したなアソレ谷五郎(谷)ハット立上りツカ／＼と大學の懷中より印を引出し○扱こそ鎮守府の御判ト兵部之介へ渡す(兵)ドレコリヤ偽物(谷)偽物とな(市)そりや臺七といふものれ迄國に弓引人外めト刀を持立掛る(兵)アイヤ申さば御連枝の御血肉(市)シャと申て(兵)此儘直に押込隠居○夫に引替義心は朽ぬ黄金の文字今か金江半兵衛と名乗り兵部之介が腹臣と成御判の詮議(谷)エ、忝し名も改むれば宮城野殿と縁組も又改めて頼の印ト刀を差出し○舅なれ共討事成らぬ義理有兄弟此刀を持て臺七を討ば谷五郎も供に本望どげしも同然肌身放さず大事に召れト渡す(宮)そんならお前は(谷)寶の詮議は身が役目(礎)頼の印を納れば又此方柄も聲殿へト刀にて振袖を切○兩袖切たは未來迄替らぬ夫婦聲引出(谷)お志しの聲引出受納仕つた(左)千秋萬歲斯る目出度敵討の門出彌々下郎め

もお供に(兵)左五平が言譚立上は供の義くる敷ない(左力)エ、忝ひ(皆々)おさらば(市)急いで出立(大頭)思へばく(ト)兵部へ切て掛る立廻り頭陀入をほんど切(左)出来た(市)見事と此仕組宜敷拍子幕

同三幕目

岡崎宿大黒屋の場

同 矢矧之橋の場

一	志賀臺七	一	左五平姉おまん
一	楠原普傳	一	宮城野
一	大黒屋伊平次	一	信夫
一	奴 左五平	一	伊平次女房お歌
一	入間與茂吉	一	おじやれおなべ
一	飛脚官兵衛	一	留女 おむす
一	おんま三九	一	同 おまつ
一	順禮七郎兵衛	一	一髪結 一人
一	加藤七右衛門	一	馬士 一人
一	吉井勝右衛門	一	錢屋 一人

一	坪内傳内	一	小間物屋 一人
一	松田彌平太	一	旅人大勢
一	高倉簡平	一	行列人數總出
一	福原新八		
一	濱松丹藏		
一	安達丈介		

造り物都て岡崎宿宿屋見勢掛りの体爰に越後獅子舞ふているおじやれ出て順禮七郎兵衛其外旅人料理人丁稚飯焚等思ひく(ト)の形りにて見て居る獅子の鳴物にて幕明くト仕出し賞て居る向より飛脚丈介状箱を刀にく(ト)りエツサ(ト)と走り出て來り(丈)大黒屋は爰だなサア足洗ふ湯を持て來いト是に構はず獅子舞ふて居る丈介腹を立○獅子おけく(ト)客をせないのかどふ致す(女)お留りさんかト此内獅子は丈介と顔見合(獅)ヤ貴殿は(丈)御身達は(獅)思ひ掛無(丈)知らんく(ト)打消す是より今夜寐間の伽は誰がい(ト)杯いふてごつちやに成て皆々奥へ遣入る田植唄に成り向ふよりお倉江戸風の女房拵らへ下女二人摘草を持出る一所にお萬籠づとへ一腰を入脊負ひ笠を持出て(倉)わつちが處は是だわいな(萬)大黒屋と申升かへ(倉)サ一人旅だと思へ留て吳と云故御案内申やした(萬)連に道ではぐれ大方尋て參るでムり升ふ此笠を表へ出して置て下さんせ(女)アイく(ト)合點じやわいな(倉)わつちが案内

仕升ふトお萬を連れて奥へ這入る先觸の侍乗物を昇せ出て宿を取る皆々奥へは入ベタ／＼にて橋懸りより與茂作同形の侍坪内多傳松田彌平太の兩人引立出る(多)こやつは御主人のお乗物を道切りしたる狼藉者(彌)く／＼し上て引す(與)ア、是々お前方も聞譯のないお人じや不調法はせぬ誤りはせぬ程に了簡さんすなど誤つていんじやないかい(兩)誤らざばいつそうぬト刀へ手を掛るを向ふより、伊待つたト大黒屋伊平次留る(侍)何んど(伊)伊平二挨拶しやんしよト江戸唄のさわぎに成伊平次通ふの形り跡よりあんま三九出て來り連立出て舞臺へ來て(伊)道中筋ではク様な事は儘有事でムリ升只今若い者が了簡すなど言升るはアリヤ入間詞でムリ升是實様入間者で有ふかの(與)入間者ではごんせぬ(伊)曾詞の裏でムリ升(侍)お乗物を道切したわつはめなれば(伊)ハテ伊平次が預り升ふ程に奥へムつて草臥なと休め風呂へつぶ入酒を呑で御休み被成升(侍)然らば亭主(伊)入間我も奥へ(侍)我々も奥へ(伊)サムリ升せト皆々奥へは入る此道具廻し造物都て同奥座敷の体爰へ伊平次女房お倉あんま三九の三人出て臺詞渡つて正面へ入る道具引割ると一面の大廣間爰に多傳彌平太丹藏勝を控へ酒を呑で居る下手に丈介髮結に髪を結せ居るおじやれ合方の心にて傍に錢屋錢を賣て居るずつと上別間に新八勝右衛門酒を呑下女酌をして居る此外旅人大勢思ひ／＼土産物などを調べ居る皆々捨臺詞にてト皆々床に入る三九忍び出て旅人の寢息を伺ひ金を盗み廻るト、丈介の懷中へ手を入れる丈介其手を上げ此聲に侍皆々起上り丈介三九と顔

合(丈)津輕官兵衛殿(三)安達丈介(侍)我々も此處に(丈)本國出走の後は行先とても別れ／＼當時身共は駿州栗島家の御家老楠原普傳様に奉公主人御代參の返るさ今宵池鯉鮒の御宿に御留り則志賀臺七殿へ密の(三)成程身共とても先達て配分の路用金は遣ひなくし偽目盲と成て宿屋／＼を徘徊致しあんま取をして凡百兩計りト金を見せ(丈)紛失の金を科にして身共が思案はコレ(三)貴殿紛失とい、立科をア、よし／＼ト思入此内に勝右衛門目を覺し金がないと言ふ思入にて大聲にて(勝)盗人が入りしぞ／＼と言ふ是にて一同さわぎと成り皆々は入る與茂吉出て來り(與)仇腹の立今日の様な冤を請ぬ事は無夫はそふと晝飯もまだで腹がへらなんだ握り飯とせまいかト竹の皮包を出し食ふ爰へ信夫火鉢を持出て來て(信)わらしは何をして居めす(與)ヤ信夫様じやない(信)與茂吉でないか(與)信夫さんじやないト握り飯を咽に詰る信夫介抱して茶を呑せ様々氣附(與)ヤレ／＼餘り思掛無すつての事に握り飯と心中慰まいとせなんだ信夫様悪い所で逢しなんだのふ(信)うん其が奉公に出張た跡でがまアさんもお死にやり申だトアも切られ申わらしはなぜ爰サアへ來やり申たふしぎに逢たたまげ申は(與)道理じやない／＼爰にいぬの切らんといふてゑらいめに合せず爰に夫で爰にいぬのじやわいのふ(信)行末わらしと女夫にするとか、様の常々思やり申たト兩人愁歎有て爰へ奥より三九多傳彌平太出て兩入を引別(丈)宵柄金の見へぬはうぬ働き上つたのだナ(與)おりやうさんな物じやぞ(傳)うさん者とぬかすぶて／＼ト立掛て打擲する

信夫留る此時伊平二出て皆々を投退る(丈)アイタ〜お主は此家の亭主大黒屋伊平次だ(伊)アイサ(丈)伊平次が盗人の宿をするか盗賊の同類か(伊)誰が金を誰が盗み升た(三)大勢の旅人の金を盗んだ其盗賊といふは(伊)やかま敷(丈)御用先の路金が紛失致たわい(伊)証詰が有ての事か(三)証詰と言は玉川三九私でムリ升(伊)又差出るか(三)ハイ〜(丈)うさん者と己れの口から白状ひろいだ(彌)引ずつて行て詮義するうせふ(伊)そふは成まい(彌)何んでならぬ(伊)堂上方の泊り客に道切して翌朝迄おれが預り外へ手放しては預つたお客様へ言譯が立ない(丈)盗まれた金子は(伊)詮義して差上升す金さへ戻ればよいじやムリ升せぬか(丈)廣い胸中じやナ(三)何にも言まい〜いわぬは言ふにいや増る暇乞さへなく斗りト上るりを語る(丈)おきやアがれ(伊)コレ小由膳を持てきな(信)アイト膳を持て前へ置く(伊)入間飯櫃が有ふ取て呉れドリヤ手盛り仕様と飯櫃へ掛る此以前三九金を此中へ隠し置し故悔りして蓋を押へる(三)此飯喰ふ事成らぬ〜(伊)妙な事を言ふナおれが内でおれが喰ふのだ構ふな(三)是〜是は又情ケないトあたまをかき(三)此飯買ふ賣て下さり升(伊)ハテ替つた者を買たがるナそりや何ぼ位に買ふと思ふ(三)三百文に買ふ(伊)いやだよト又蓋を明よふとする(三)夫なら五ペで買ふ(伊)賣らぬ〜(三)どつこい廿ペ(伊)いやじや〜(三)百貫で買ふ(伊)何百貫夫なら賣ふ(丈)是さ飯一杯を百貫とはどふだぞい(三)どふのこふのは無さつき働いたかのナト吞込せ〇お前金取替て被下升せ(丈)成程是非が無

取替て遣ふト打がへの金を出す伊平二邊りへ目を配りそつと櫃の中の金を出し懐へ入る丈介三九へ金十六兩渡す(三)百貫を金に直して十六兩ソレ飯代じや(伊)相場に合して不足なれど負て置ふト引替(三)嬉しや〜トひつを抱〇ドレ奥へ行ふト三人立上る(伊)三人共に待た(三人)用が有か(伊)御飛脚こなたどこの屋敷の御飛脚だ(丈)駿河府中屋敷の家來だ夫がどふした(伊)此金子を見れば一兩〜高と言ふ字の極印コリヤ奥州高館の御用金五千兩の紛失有て道中の宿屋〜へ配府の廻つて御詮義中駿河の御飛脚が高館の御用金はどふして所持して居さつしやるか(丈)サ夫は(伊)トおれが庄屋殿ならば詮義するが大黒屋伊平次町人の身でいふも野暮かいのふ三九(三)左様共〜其金こつちへト取に掛るを焼火箸取て夫金と三九が目先へ突附(伊)つかみたがるあんまでも此金計りはめつたにはつかまれない但しつかむか(三)サア(伊)今宵の花だ取ておけト火箸にて頭を打(三)人殺し〜アツ、〜(丈)いつそうぬト扱て掛る多傳彌平太同じく三九廻廻る伊平次侍二人を投丈介を當る三九を取て押へ(伊)動きキアがるなト此さわざに旅人大勢出て金を取戻して貰ふと皆々は入下女々を持出て(女)旦那様表屋敷の泊りの女中が上て呉とおこし升たト出す伊平次取て讀奥よりお倉出て居て悋氣をする(伊)サ是柄は信夫を妾にして抱て寝る(倉)さふ成ならして見やしやんせ(與)腹が立てたいが悪ふ無ぞ(信)てんどふ申いやだアワサト色合に成り(伊)ついに逢た事も無女中の多筋が分らぬト爰へおまん出て(萬)是はマア何事でムん

すわいな(倉)女中様一体おまい柄起つた事あんな濡多送りなんして濟ぬぞ(萬)是は又迷惑ナ(伊)最前の多はお前でムんすかな(萬)左様でムり升(伊)して多の様子は(萬)サ我の主
人杉本甚内様が横死の後夫左五平は御息女宮城野様と敵討に出立敵は同家中の志賀臺七と
知れ乍御邸も召上られ奥様にも御出國又宮城野様には腹替りの御妹御信夫様の御行衛も知
れず御主の在所敵の在所尋ねんものと東海道は往來繁く夫故御尋申た今宵のしぎでムり升
(伊)是女房手前は知るめへが己は元甚内様の家來シテ宮城野様や佐五平はどこにムるぞへ
(萬)日の中は別れく先程表へ笠を出して置升たれば道が違わねばよふムり升(伊)妹御信
夫様の行衛は知れ升たかな(萬)今に廻り逢升せぬト傍に落て有刀を取上見て○見覺へ有安
達丈介の刀ハテナト爰へ丈介刀を探し出る(丈)其刀をト取ふとするを(萬)扱こそ安達丈介
殿(伊)其飛脚は(萬)敵臺七が馴合の悪者ト引捕へる○白狀しや(伊)臺七が行衛白狀しろト
いためる(丈)臺七殿は東國へ引返す積り今宵は御油か赤坂二夕川か濱松(萬)スリヤ臺七は
(伊)こいつ目付に連て行詮義して見たがよい(萬)宮城野左五平が見へ升たら(倉)留て置升
(伊)早ふ行んせ(萬)行て参り升ふト此仕組よろしく道具返しに成造り物放れ坐敷の躰爰に
床の上に臺七住居密書を讀居る獨吟に成「口せつは宵の夢なれや二夕枕の妹脊川袖柄袖へ
手を入れてじつとべたる下紐のト此内信夫寐卷形りにて出て住居泣て居る(臺)伽に参つた
か是へつゝと來よハテ扱來いと申にト引寄る○ハテ田舎にも京だ○泣て居るとは傍輩共と

いさかいか(信)アイ(臺)遠國者と見へるが生國はどこだ(信)うんどもづない在國奥州(臺)
奥州はいづくじや(信)白石在逆井村と申所サア(臺)身を賣たは親孝行の爲か夫を泣事が有
物かト獨吟に成上手家躰の障子明ると伊平次寐轉びお倉茶を煮て居る(信)語るもがいか
なしひうんどもが身だはサアまだ手ばりない其内にだかアに放れ一人がまアは大病人參代
に吉原へ身をおしやらくに出申て其後聞ばがまアはお死にやり申たトサだゝアも人に切ら
れがまアに死別れ泣つゝけて居申は獨吟「雄雌の片羽のとほく」と子に迷ひ行小夜千鳥(臺)
いか様人の行末と水の流れ某とてもア、浮世だナシテ父の名は何んど云ふ(信)だゝアの
名は高館の家中でサ武藝の達人杉本甚内サア(臺)何其内○ハテ侍の娘だナ(信)敵が討度と
思ふてあるわサ(臺)シテ敵の名を存じあるか(信)名は志賀臺七サ(臺)ム、「去にてもうし
や川間の偽紫の色悪ふやつれ顔見るがかなしやト此歌の内お倉聞耳立て居る(伊)入間者は
替た物言だナア(臺)ハテ扱不便な身の上だナト刀を取切らふと思入○どふぞ逢してやり度
物ナ(信)夫頼申すト咄しの内切掛る思入有て止る信夫心附(信)何で切申かおづないたまげ
申く(臺)だまらふついつ小間事ぬかすなト切掛るを逃廻る此内伊平次お倉に刀を取に遣
る唄「子は安方の安からぬ親は空にて血の涙ト伊平次つかく」と出て(伊)お客様何事でム
り升るな(臺)其方は此家の亭主(伊)ハイ信夫めが何ぞ不調法でも仕升たか(臺)いかにもお
どし入て手に入れん爲(伊)成程御尤至極でムり升外の女子を出し升ふ(臺)外の女は望で無

身の代金を持って身受致そふ(伊)信夫は譯有て他所へは遣し升せぬ(臺)身請さずばうぬト
 追行ふとするを引止め(伊)チト理不盡かど存升す(臺)女をかばふ我が俗性(伊)私よりはわ
 なたの俗性(臺)なんと(伊)何用有て何國柄どれへの御下りでムり升な(臺)だまれ身が吟味
 かうぬが身の上(臺)こなたの本名白狀さつしやれ(兩人)何を小癪なト切結びお倉中へ割て
 入り(倉)お二人りの言分明日迄わつちに預けておくんなんし(兩)何と(伊)明日迄はゆつく
 り二時(臺)色能返事を待ておらふト唄にて奥へは入る(伊)宮城野様信夫様が行衛知れなば
 鎌倉屋敷へ送り吳よと兵部之介様がお頼みお前が信夫様で有ふとは思ひ掛なんだ(倉)主も
 以前は甚内様の御家來佐五平殿の兄弟(伊)敵も頼て討升る(信)御亭主おごふ様悦び申は
 くトバタ／＼に成向ふよりお萬丈介に細を掛て引立出て(萬)サア／＼手掛りに取附升た
 (伊)手掛りとは耳寄な(萬)丈介が白狀直に引返し升た(伊)シテ飛脚めはト丈介を前へ出し
 (萬)サ今の通り白狀せ(丈)臺七様が止りは此岡崎じやわい(萬)扱こそナ(伊)是悦んせ臺七
 は奥に居おるぞトバタ／＼にて與茂吉出て(與)今宵の泊り客は皆待めと一ツでないして俄
 に出立せぬと言ふて握り飯を持つに裏道からうせなんだ／＼(皆)ヤア／＼(伊)信夫様を
 伴ふて遠州路を鎌倉へ欠拔宇治の屋敷へ(與)おれも供して一所行まい(萬)出合ふ處は(伊)
 矢矧の橋の弓手にて(萬)心得升た(倉)信夫様はわつちがお供(伊)入間も来いと伊平二信夫
 の手を引お倉與茂吉も奥へは入るお萬は敵役四人を相手に太鼓入の鳴物にて大立廻りに成

皆々逃げては入お萬追行此道具江戸さわざにて返し造り物舞臺一面矢はぎの橋をせり上げ
 向ふ打拔東雲の遠見日覆より柳の釣り枝橋の真中に番小屋道具納ると本釣鐘を打込諸士七
 右衛門彌平太多傳附添出て皆々服面頭巾にて顔を隠し跡より臺七あたりを見て(臺)何れも
 扱ひやひお目に出合升た彼等一度に落逢ふて參らふとは存じ掛がムらなんだ(七)あぶなひ
 事でムつた(臺)大學様の御内意に依て本國へ參らふとは存知たれど彼地とても氣ぶさいに
 存る(多)シテ上方へ引返すは(三人)何れを目當に(臺)最前の密書に楠原宇治には城州名清
 水へ領主の代參下向の道筋今宵は池鯉鮒に泊りと有是へ參つて立籠り官兵衛を飛脚に仕立
 大學様へ遣してムる(四人)夫でわかり升たト臺七番屋の家根の霜へ指にて密書を書く七衛
 門見て是を讀む(七)池鯉鮒にムる臺七殿が鎌倉へ參ると書殘され升た(臺)去ば池鯉鮒へ參
 る當座の手立サト向ふにて人音する○おれは慥に何れも来やれト橋を渡り上手へは入る早
 い合方はた／＼に成三九鉢巻をして飛脚の形りにてお萬と狀箱を奪ひ合立廻り乍出る(萬)
 狀箱渡しや(官)御用先が急ぐト密書を奪ひ合の立廻りト々お萬密書を取官兵衛を押へ附開
 きすかし見て○何々今宵岡崎迄若仕候處杉本身寄りの者共同ひ候に付又々上方へ引返し品
 に寄彼邸へ入込み堅く身をひそめば追々御左右申上候伊達大學様へ臺七よりスリヤ臺七は
 上方へト又立廻り乍霜に書し密書を見て讀下し(萬)ム、密書とは相違せし書附トお萬霜の
 中へさら／＼と指にて○敵臺七行先上方にて候身寄の人々上方へ御越可被成候左五平女房

萬是を書残すト是を官兵衛消んとする立廻り又爰へ丈介走り出て三人大立廻りトお萬は敵の片害と二人共に川中へ切込上手へは入る引違へ臺七出て(臺)今のは儘にト向ふ人音する故小隠れするト向ふより宮城野左五平の兩人出て來り(宮)左五平どこで間違ふたぞいのふ(左)去ばでムり升るマアお越し被成れ升と橋の際へ來るト諸士新八丹藏門十郎の三人出て○宮城野主従わいらがうせるを待て居た(左)うぬらは臺七一味の奴原扱は臺七に頼れたナ(門)知れた事だト三人掛るト三人遊ては入る宮城の左五平上手へは入臺七出て此時上手より本行列にて乗物を昇出る此時宮ぎの此中へ割ては入り(宮)御免し被成ませト供先の者見てへだてる又上手よりお萬も同じく割ては入供人狼藉くどさわぐ乗物の中より立ていと聲して戸を明(普)奥州高館の家中杉本甚内娘宮城野(宮)エ、(普)内縁有栗島の家老楠原普傳石清水八幡宮へ殿の代參只今下向(宮)御存じの上は包むに及ばぬ此身の上(萬)ねろふ敵は志賀臺七正敷此傍りに(普)旅人の矢矧を今宵通りなばあすや渡らん豊川の橋(萬)何と(普)杉本氏とは無二の某助太刀して討して取らせふ(萬宮)エ、忝い(普)乗物やれ(普)ハア、ト雨車に成り雨支度をして行列にて兩人を此中へ交る向ふへは入臺七出て見送り落たる合羽を着笠を冠る爰へ左五平出て伺ふ附廻しに成中間酔たる思入にて出て邪魔には入ト、臺七は花道へは入左五平中間の笠合羽を取り着込み宜敷拍子幕ト共に向ふへは入る跡シヤギリ

繪本巖流島

序幕 貳幕目 三幕目

- | | | | |
|---|---------|---|---------|
| 一 | 一の宮花見の場 | 一 | 奴 權助 |
| 一 | 白倉邸道場の場 | 一 | 同 關助 |
| 一 | 同 奥座舖の場 | 一 | 家來大せい |
| 一 | 同 風呂場の場 | 一 | 下部大せい |
| 一 | 裏乎草土手の場 | 一 | 仕出シ三人 |
| 一 | 宮本無三四 | 一 | |
| 一 | 白倉傳五右衛門 | 一 | |
| 一 | 福田林左衛門 | 一 | |
| 一 | 村山源藏 | 一 | |
| 一 | 高田専之助 | 一 | |
| 一 | 貝澤萬右衛門 | 一 | |
| 一 | 森脇佐十郎 | 一 | 娘 系菰 |
| 一 | 白倉傳之丞 | 一 | 白倉女房岡の谷 |

一 猪子内匠
一 奴 土手助

一 腰元 お笹
一 同 幾代

本舞臺平舞臺淺黄幕石の鳥居有三備一の宮吉備津神社境内の塲神樂にて幕明くと向ふより岡の谷衣装着流抱帶櫛出帽子系萩振袖抱帶同帽子跡より白倉傳之丞袴羽織跡より腰元お笹幾代付添跡茶辨當毛氈を乗關助出(岡野谷)爰が一の宮關助先へ行能所る毛氈引待ていや(關助)チイ(岡)是から神前へ行夫白倉傳五衛門殿の武運長久又外の女子に見替らぬ様信を取て祈ふわいの娘も傳之丞も能ふ御願申たが能(傳之丞)此吉備津大臣は唐へムた軍神故武藝の達人と成て親傳五右衛門が跡を次願を致さふ(系萩)弟出かしやつた武家の家に生れては夫が肝心の心懸又母様の仰しやつたは今日は他人不交花見の慰と思召ての事有(お笹)左様でム升今日は奥様や系萩様若様のお陰で一の宮参りの(幾代)言わす通外へ出ると心が浮かれ花見が嬉ふて(岡)女子共とした事が譯も無若くは外へ出が樂みで有たが今は夫どの傍が離るが辭じやわいのふ本の今日は付合(系)夫は難有ム升かゝ様がお出被下たに依大躰仕合ト神樂に成皆く鳥井の内へ遣入福田林左衛門村山源藏羽織袴大小にて出舞臺へ來て(林)源藏殿何と出懸た所は氣の晴て宜ではないか(源)毎日くの御前勤日番には劍術弓的鐵炮馬責に中斷無一日も案氣なき我く今日は思懸無御誘引に預仕合でム升(林)是はく痛入る御挨拶夫では拙者が御頼申事も申出にくふる(源)今日の御誘引は拙者にな

んぞ(林)折入ても頼申度義がムて(源)貴殿拙者竹馬の朋友御遠慮には及不申お頼の所御咄被成(林)御詞に驕る御咄申そう近頃恥敷義成共彼先生白倉氏の御息女系萩殿に惚てく寝ても覺ても忘るゝ隙なく夫故何卒仲人をお頼申さん爲態今日同道仕たのさ(源)何事かと存事たが林左衛門殿日比の御氣性にも似合ぬ戀は心の外と申世の譬女に迷者もムる増て先生の娘御相應と申縁談白倉殿へ申入仲人首尾而御目に懸けふ成ふなら娘を先へ手に入て置は相談が早ひと言物じや(林)忽滑りはムらぬ彼先生の内室岡の谷殿へ度く鼻藥を養て其咄致たれば白倉殿の所は宜しなに言ふて遣ふ然娘は成さぬ中と言殊更堅者男撰貴殿と同意案先娘を先へ得心させば表向仲人を以白倉殿へ申出すと此言分此所へ参たは岡の谷殿より内意の知せ屋敷は人目繁く娘を連今日一の宮へ花見参候得は御出有て娘を手に入ひと有る文が参て夫故今日の趣向でムるてや(源)夫は上首尾最早系萩殿は手に入れた同前其知せこそ幸直に逢て差向が結句早くムる(林)大方岡の谷殿は先へ被参たでムふ御太義乍岡の殿を内證で是へ御呼被下まいかな(源)然ば左様仕らふ林左殿(林)御苦勞に存事升ト歌に成源藏鳥居の方へ遣入林左衛門跡に床几を腰懸る岡の谷鳥居の内より出(岡)是は林左衛門様唯今でムり升るか(林)是は先生の御内室昨日はお多にて御知らせ被下今日はまだ公用もムたれど相役を頼参升た(岡)能こそく物堅夫傳五右衛門殿花見遊山も度くは免されず今日過ば娘は連て被出ぬ故(林)是を参らいでたまる物か参懸に小間物屋で珍しい新切の煙草粉入とム

る故鹿乍手土産に差上る(岡)本に珍しい新切何やら重たいコリヤ壹歩が澤と入て有貨ふて置升ふ今娘を爰へ御越升程に直に御口説なされやどりや娘を呼ふかト岡の谷鳥居の内え這入糸菘出て(糸)私しを呼しやんしすはあれにムるは福田林左衛門様申く林左衛門様(林)是はく糸菘殿(糸)今日は母様の花見の思召能慰致升幸用意の笹もムり升お越に成て御酒一ツ(林)夫は忝御馳走に預升ふ些とこな様え申入度事がムる(糸)御用は何事でムり升(林)其用はこふでムるト糸菘に抱付(糸)林左衛門様コリヤ何事を被成升(林)糸菘殿侍一人助るとして色能い返事を今爰で御聞せ被成て被下(糸)是はしたり林左衛門様御座興かど存事升たが御本心不義は御家の御法度親の免さぬは第一親え不孝是斗かりは御免されて被下升せ(林)然は親々が得心有らば(糸)サア親の儘にも成らぬは此道斗くとふ仰しやんな嫌じやわいなト林左衛門を突退け鳥居の内へ這入(林)思の外今の形勢工面が違ふたわい(源)林左衛門殿首尾は大極でムふ(林)寄付る事か跣飛され(源)一應ではアツト申まい母御の得心なれば今一度我くも合榎致さふ(林)何様其所も有わいサアムれト神樂に成兩人鳥居え這入無三四着流股引絹の上へ風呂敷包菱に脊負皮鞆皮鞆袋を入竹の皮深き笠を持舞臺へ來て(無)是此所は備前の一の宮吉備津宮の社諸國修行の序なれば神社佛閣拜仕も此身の武運の祈禱ト被入合方拜終○備中の矢影より此所迄は餘程の道程幸此床几暫休足致參ふト床凡に懸り控る鳥居の内より糸菘を林左源兩人追懸出糸菘を捕え(源)是さ糸菘殿あれ程思てム

る事たつた一言云て被下い(糸)源藏殿同じ様に不義は御家の堅い御法度と言ふ所へ御心付升せぬか(源)其義承知而居ど御得心なら親御え言入仲人仕と不義の名は有まい(糸)譬と様やかゝ様が得心でも私しが辭でムんすト源藏困林左衛門くつと堰(林)モウ能い最前より様くど兩人が頼んだぞよ夫に聞譯無堅意地女郎可愛さ餘て憎さ百倍武士の意地討放して腹いせする(源)此源藏も頼まれ此儘では一分が立ぬ彌辭と有れば不便乍も手に懸る(糸)譬殺され様が辭と思お方御二人様御腹が立なら存分にさしやんせト兩人が真中へ直り手を合す源藏恟して(源)殺されても林左殿は辭か夫程に嫌ふて遣ぬが能い(林)最ふ破れかぶれじや糸菘覺悟ト刀引拔立寄と無三四林左衛門付廻し持たる煙管にて一寸當る林左ウント倒る源藏夫はと寄を是もばんと當る同じくウント倒る無三四糸菘を引立て(糸)あなたは(無)邪魔は拂らふた此間に早ふ(糸)誰様かは存事升ぬが今の難義を御救被下升て何と御禮を申さふやら(無)禮には及ぬ早ふくト振向無三四の顔を見て(糸)アイくあなた様は何所のち方さんでムり升へ(無)住所定ぬ天竺浪人(糸)そんならどぞ私が邸へ(無)ぐずく言間に兩人の當が戻れば何かの妨早ふムれト始終無三四を見蕩て居○ハテムれと云ふにト屹度言是にて無三四が顔を詠鳥居の内へ這入林左衛門が家來黒天奴にて土手介出て此躰を見恟し無三四兩人を寂見て○仁躰も悪からぬ二人の侍女を捕え法を見出す知行與得主人の顔が詠らるト笑て向へ行懸る土手介腹立刀の目釘をしめし前へ出(土)侍待たト大きな聲で言無

三四振歸る土手介じみく〜とへたる無三四肩で笑ふ靜成神樂に成鎮く〜這入林左衛門源藏
 共に氣の付土手介抱して(土)御兩所様御心が付升たか(林源 我く〜が此形勢はナ(土)御
 迎に參し所甘餘の浪人御兩人を手込にしたる様子憎いやつめと馳付刀のむね打に打すへ升
 たが吠泣く〜逃失升た(林)何をぬかすやらシテ系萩は如何致たか(土)白倉の奥様始弟御様
 共早も歸道にて奴め御目に懸升てム升(林)系萩は早歸しとな此儘では相濟升ぬ(源)何は格
 別憎くい今の曲者土手介(源土)そふじや(林)急相して何國へ行(源)知れた事今の若者追懸
 唯一討(土)御旦那の鬱憤を(林)白癡者音に聞えし手利の某さゑ唯一當致程者御手前達手に
 合ふか血氣にはやるは卑夫の勇源して今の若者を討取土御思案がムるか(林)譬何程の
 駿勇たり共某習ひ覺し手練を以討取手並は斯通ト土手介を投る○然ば直に先生の邸え(源)
 參升ふ(林源)アイタ〜(土)憎くい今の浪人め(林)娘も憎し(源)二タ道懸て(林)程は行き
 い(源)林左殿(林)土手介續けト兩人尻端打土手介向え這入是にて返し右之石の鳥居上手え
 引て取淺黄幕切落本舞臺二重舞臺向襖憶病え折廻障子家躰橋懸邸堀の見切二重に岡の谷韜
 振上系萩を叩ふとして居る是を腰元二人兩方を留て居る系萩泣て居る見得琴歌にて道具留
 る(岡)しぶとい女郎私が云通に林左衛門殿え嫁入するか辭とぬかすと此韜が御見舞申返答
 はどうじや(系)かゝ様の御折檻でも此事斗は堪忍して下さんせいやな殿御の所へ嫁入が成
 物でムんす推量して下さんせ(岡)林左衛門殿見柄達者そふで太逞な生れ付滅太に外から惚

人も有そも無男振内を大事に守て何迄も可愛柄る〜ては無か親が悪い事は言はぬ腰元も進
 よヲ、と言や合點が入たか(系)是計は堪忍して下さんせ(岡)是で堪忍して遣ふト韜にて叩
 くも笹幾代留る(系)縦叩かても殺されても此事斗は辭でムす噉様忍て下さりませ是迄御詞
 背た事は無けれ共虫が嫌升辭じや〜と思所え昨日一の宮にて見初た御方サア見初被たが
 私が因果成れ共此事斗はどふぞ(岡)しぶといつそ叩殺してこまそうト急相して立懸る腰
 元留る振切系萩を叩かふとする能時傳五右衛門着附羽織散髪にてすつと出岡の谷が韜をた
 くりすつと立岡の谷恟して(岡)御前は夫傳五右衛門殿(系)爺様(傳)娘系萩女房岡の谷見れ
 ば女の分際しに韜を構え立騒で何事じや(岡)余娘が堅意地故堪兼ての折檻(傳)娘が詞背なら
 何様共異見の仕様も有可に輕く〜敷棒裁配重て御志遣たら其儘に置ぬぞや嗜召れ(岡)結構
 な事共等じや傳之丞は二人が中系萩は被成ぬ中精出て親子して憎で御吳れ(傳)夫トに向て
 詞を返馬鹿者め(系)何事も私が無調法柄(傳)娘何も構事は無い腰元共娘を次へ伴慰よ(笹
 幾)長升たト系萩腰元奥這入(傳)娘は様子有故大切に致吳よと言付しを忘たか重て手荒く
 致と免さぬぞト橋懸より傳之丞林左衛門源藏專之介佐十郎内匠萬右衛門右羽織袴にて出る
 (七人)是は先生是に御渡り被成か(傳)何れも御早ひ御越若侍達は早朝より稽古場に居る
 (皆々)左様ならば稽古場へ參升ふ(傳)林左殿源藏殿御兩人に密に御咄申度義がムる何れも
 方は御先へト岡の谷傳之丞專之介佐十郎萬右衛門内匠這入る(傳)御兩所是へト林左衛門源

藏二重へ上り○兼て門弟中を尊致置たる拙者が甥佐々木嚴流と申者誠は佐々木左京大夫定頼公の御胤元某は佐々木の家臣拙者が妹浪の戸と申が定頼公の御氣に叶ひ其妹が腹より出生致たる嚴流系某も同敷定頼公の血縁佐々木家没落の時兄は十三才妹は乳呑子由縁有て當國へ參斯通兄弟甥姪とは申乍主人の御胤中へ鹿畧には成憎嚴流は一ト器量有者にて再佐々木家を引起さん心差兼て有り然に此度朋友を討て立退嚴流密に申越たるは宮本無三四と言竟究の若者嚴流を親の敵と付規由見當次第討て捨るが近道災を除きとふる其無三四と云奴申御見當りムらば御知らせ被下又門弟も密に御咄置被下御兩人へ御咄と申は此事でムるてや(源)只今の御咄大事でムり升御氣遣被成な我へ見當り次第御知らせ申(林)何にも左様成若者見當り次第討て捨て升ふ(傳)師弟の間柄御深切忝ふ存升るサア稽古場を參升ふト歌に成チヨソにて返し舞臺飾付橋懸り見切上手へ引能所に門有出入仕る舞臺一面に塀に成と白囃に成關助權介奴にて切水掃目を入れて居る宜敷有て(關)權平水も能加減におけ(權)起て食を喰や喰ずに掃除に懸て能加減に置サ早く部屋へ居て休べい(關)此又郎は日が暮や暮ぬで門をメ内の者豈人も夜遊さぬ大体不自由な事無いか(權)部屋酒を引懸る時着がない塀外へ焚賣屋賣歩行共塀越には買れず困物だ(關)爰塀の營が壞て有此穴壞て置ば何でも買へる(權)手先出る丈間些ト壞てサト脇差の鏢で穴を明け(關)斯して置は晚柄買へるぞサア休べいト奴兩人手桶持遣入(内にて)ヤアへへト被太被入無三四初手の拵へ

にて出る内に立合の懸聲の聲を聞立留りて(無)今四海漸く久吉公掌握に任と雖未牛を桃林に放つに不至夫故國へ仕官の人々武術の稽古何れの武家にも絶る事無此郎は何人成ぞ定て當家中師範人と覺何流成ぞとうぞ見たき物じやがト内にて始終アアと懸聲有り○稽古場は此塀一ト重何方と聞得る流義が見度いナト塀を見廻し右壞穴を見付○是幸の壁の破ト右穴より覗立戻り○ハテ心得ぬ何流共不分太刀捌尤神影流の形少見ゆれ共左にも不有合點の行ぬト又穴より覗と專之介稽古場の形にて出(專)狼藉千萬塀越に内を伺ふうぬは晝鷲じやな當時御師範たる白倉傳五右衛門様の御邸だぞ當所には見馴ぬ類と云盜賊に相違無い引括て詮義するうせふト首筋捕引立(無)全拙者は左様な者ではムり升ぬ旅の者でムり升諸國に過當御城下の賑敷亭に御家中の御邸をも拜見致度案内存ねば虚へ參し所頼打の聲を承浦山敷存幸壁の破より各の稽古を拜見致せしは拙者が誤御了簡被下(專)唯奴が風体合點行ぬ此壁壞ては有筈が無い壁を破つて内を伺ふ盜賊晝鷲に相違無い細事云はさうせふト引立に懸る無三四見事に投る(專)唯奴手向ひか(無)全手向ひは仕らぬ唯通懸稽古の聲に好敷壁の破より覗たる斗盜賊物取とは近頃迷惑に存升(專)何ヶ様に偽つても此壁破しに違無(無)スリヤ證據見届仰らるか(專)不入詞咎ト又懸る鳥渡突退ける仰面に倒起上て(專)了簡が成らぬト關助權介萬右衛門出(萬)專之助殿聲高に何事でムる(專)此所へ參し所夫に居毛二才めがアノ如く壁を破邸の内を覗升るさすれば盜賊に違ムらぬ引立先生前へ連行ふと

存れば却て手向致故此至宜(萬)言語同斷憎曲者其奴門内へ引入升ふ(無)當家の主人に御詫申唯此儘參升ふト無三四を中へ挾門内へ遣入ト返し本舞臺平舞臺一面の淺黄壁上手障子屋躰下座は一面の通刀掛、韜竹刀木太刀鎗長刀飾有上手屋躰内傳五右衛門擣敷脇息にもたれ烟草を吞指圖の見得林左衛門源藏韜打立介佐十郎内匠見て居る白囃子にて道具留る(傳)兩所共勵召る其功顯はれ拙者が大慶何國より武者修行參立會を望共氣遣無何程の者參共返歸は知れて有何れもが上達祝はしう存る(内)何か御門前が騒敷ト無三四を四人取圍(林)騒敷此躰は(專)此奴旅人と見得胡蓋成類擣御邸の堀を壊ち我くが稽古を盜取る狼藉者其上拙者に手向致(萬)御差圖を請糺明致さふと存し(關權)是迄引居升てムリ升(傳)見る所帶刀致居ば他國の間者と相見得(林)源藏殿土手助が咄に一の宮で(源)何クにも寸分違はぬ昨日ふの曲者(林)何れも其奴に細懸さつしやれ(傳)何れも待た其侍傳五右衛門が前へ呼わしやれ(林)先生の御召じや(無)われにムるは當家御主となれば御免被下ト塵打拂刀を提優くと通○御用はな(傳)某は當國主が稽古場を預居白倉傳五右衛門と申者貴殿何國の旅人にて私の旅行か但生命を請て何國へ越く人成や包ます申されよ(無)拙者は仕官の者不有諸國遍歴の武者修行扱は白倉氏にて有しよな我修行の道す柄先生の武名高く尋參て御對面又諸家中の武威をも拜見致度明日は參先生を御尋申さんと存せし所幸爰に參しは深き因縁某も一等流の印可を得たる者成先生の武藝に力足すは慎で師と仰可奉し又某未熟成と雖先生我に勝

給ふ事能ずば白倉殿を師と頼みて益無事願ば先生拙者と立會被下ば大慶何卒御立會被下ト門弟皆く惱て(傳)扱は修行の人にて有しよな左様共存不門弟衆先程も失禮眞平御用捨被下い某と立會の義申さるは尤なれど不肖足共一國の上に立師絶足身最初より立會ては主人への聞へを憚申我高弟の内何れ成共出て先心見に立會見被よ我門弟に貴様打負なば手前邸に滯留致一ヶ月が二ヶ月の内に入中で韜の持る様教て進ぜる教へて遣門弟中聞かつしやれたか此旅人拙者と仕合望まるは彼辨無當才の子虎の恐敷を不知ぬ譬ハくシテ貴殿の出所姓名を被申よ(無)成程姓名御尋御尤乍去某萬が一勝を取らば滯留無益成又打負なば先生は師成何とて姓名を隠申さん勝負の有無に依名乗申さん御門人との立會御尤に存る何れ成共相人は構ぬ拙者流義は兩刀を面と仕相手は眞劍でも此方は木刀御登人にて心元無ば何人成共一時に立會申そふ門弟中用意して夫へ出さつしやれ(林)先生の指圖は待ぬ林左衛門が(源)イヤ此源藏柄(專)何れも高弟此專之助が參らふ(傳)何れも騒しい某が指圖も不待疲勞千萬此人に相應の相手は幸高田專之介立會召れ(專)畏升てムリ升御浪人用意能は高田專之介御相手に成升ふ(無)是は御苦勞然ば參升ふかト双方韜への傍へ寄專之介打込直に叩落足をかく專之介見事に倒る起上る所を叩皆く惱傳五右衛門(林)何れも御免拙者がト林左を苛く叩直殘の門弟皆く韜を持懸る無三四林左の韜を捨て兩刀の立廻いろく有てト皆く不殘打居る傳五右衛門立上堪兼根押の鍵を取突て懸無三四兩刀にて鍵を卷被落門弟

皆く寄らふとする無三四振蹄皆く小さく成傳五右衛門無三四の手を取上座へ直し平伏して(傳)扱く驚入足御手並某三十年來武術を勵既今年に至迄諸國の名有達人に出合と雖未貴君の様成名人に逢たる事無誠に凡夫の業とは不存今日より貴君の門人と成て流義を教へ被下先く君の生國御姓名承たし夫何れも御詫くト皆く口惜乍身を改(林)先刻より失禮(源)偏に御用捨(皆)被下升ふト頭を下る無三四禮を返(無)是は先生先御手を被上い何れも手被上い白倉殿の御手練驚入升た中く拙者杯可及所不有御尋の上は包に不及拙者生國は肥後國宮本無三四と申者で(皆)何宮本無三四となト恟立懸ろとするど顔にて押へ(傳)宮本氏と貴殿は吉岡兼房殿の御實子宮本武右衛門殿へ御養子に被參し其無三四殿で(無)委敷御存で(無)其高名は四方に響て隱無定て旅行の勞爰は稽古場與へ(無)今より師弟の御盃何萬右衛門殿内匠殿與え御案内(無)何様仰之通暫時休足被仰付いと目禮して三人這入跡に傳五右衛門林左衛門源藏專之介佐十郎殘(林)今の無三四と言は(源)御咄有た(傳)巖流に仇す無三四(林)此所へ參しは飛で火に入夏の虫(源)得物を引提(專)與へ踏込(佐)たつた一討(林)何れも(傳)中く各方五人十人の手に合者で無討取には計略有不騷と各と談合ずく幸新に指せざる湯風呂有丈夫に厚板を以持たり無三四に酒を進熱酔の所へ風呂を焚せ何心無く彼奴が入處を戸尻に栓をかい急に焚せ水入の穴より熱湯流込爲に皮肉爛終に蒸殺しと可成し手を動さず自滅させる我工夫彼剛勢にして

風呂より出んとする時各其時こそ力一倍角々を押へて動かせぬ様被致(林)天晴妙計(源)滅太に酒を強なれば(傳)幸娘を給仕出し色で什懸酒を進なば戀に心を奪せ其所へ今の手段(皆)適手つがひ(傳)竊にく上るりしめし合せて奥と口別てぞト琴歌にて返し本舞臺二重向金襴上下手共兩家躰障子與座敷の躰無三四布團を敷寝轉で居此見得道具留る上るり出て行白倉が奥座敷宮本無三四が旅衣今宵假寝の翌は猶行衛定めぬ煙艸腰元お笹が次の間柄行義正敷打通(笹)申御客人様嘸御退屈に(無)御茶上り升ふと差出すト手に取(無)是は(無)虜外千萬當邸は門人大勢有れば申吉岡太郎左衛門と云人と出合ふと云様な咄でも聞は召ぬか(笹)左様な噂は承升ぬ誰ぞに問ふて參んじ升ふ(無)イヤ夫には及ぬ必も身が尋たど誰にも咄は無用(笹)合點で(無)御休被成升せ(無)御太義く「太義く腰元お笹立て行間に又爰へ幾代が運ぶ菓子盆にそよどの音は松風やたんと有平糖積並べてぞ指出し(幾)定し御淋う(無)鹿末成御菓子お慰に(無)何も御搦無共白倉公にちと是へ御出被成御當地のお咄も承度と申て呉れ(幾)左様申升ふ御緩りと(無)御苦勞く「挨拶そこく腰元は次へ行無三四は不思議顔〇心得ぬ武家の作法に似合ぬ女に茶の給仕をさせ不行義成形勢殊に最前白倉が詞の端我を吉岡の實子宮本を養子に行し様子委敷知たは合點行ぬ若や敵嚴流の由縁成かハテ心得ぬハテ心得ぬと思案に暮るト間より明て十六夜月の眉戀しき人の有ぞとは知で持たる蓋の模様縁の糸萩無三四が傍行義正敷手を支

(糸)御勞休めに笹一トツ御上り被下升ふ成らぬ嬉しふ存升(無)御息女拙者酒は大不得手御馳走は請たも同前(糸)折角爺様の志しいつは不成と御一ツ上つて下さり升せ「無理に進むる糸萩が思はず見合す無三四が顔(糸)ヤアあなたは無(無)ムこなたは(糸)昨日ふ一の宮の鳥居の前で(無)鳥渡出逢た御娘御(糸)其時の御侍様(無)思も寄ぬ(兩人)是はしたり「是はしたりと手を打無三四此方は今更耻敷赤らむ顔は通天の盛羞明風情成(無)扱は此方は白倉殿の息女で有たよな(糸)何方は能來て御吳被成た何所の御方やら所も知らず辛氣で(無)成らなんだのに様來て御吳なさつたナア是や最大体嬉事じや無最前柄來てムたかへ早ふ知して呉たが能何迄も私が邸に御滞留被成て被下升得つとこんな嬉事はないいな「滅太無性の悦に一圓不思宮本が顔に見蕩て至けり(無)何かいかふ御悦びの躰何事でムる(糸)是が嬉敷無ふて何と致升ふサア其嬉は昨日既の事切被升處を御情で命助つた私其命の親の何方に今御目に懸し物嬉敷無ふて何と致升ふ(無)夫で今様に悦でムるのふム、ハ(糸)最前柄私が形勢定て氣違亂心の様に思召ふが何を隠升ふお目に懸りし其時に立派な屹度した御侍様じやと「眞實底柄思染いつそ心の有丈を打明言ふと思共徒過た女じやと思召のが恥乍○其儘御別申たれど今一度逢せてたべと神(無)様祈つた印結の神の御引合せ御氣には染まいけれど私が心推量して唯の一ト詞御嬉御詞を「聞かしてやめのと打付に心の丈を打明し恍惚子育も今更に戀に如才は媚て無三四が傍へ寄添は(無)寄まい(無)大切成望有拙者殊更女に物

言返すさへ心不能増て善惡不知白倉が娘必猥ク間敷事被申な(糸)小兒の時柄白倉様御夫婦の御世話に成私が肌身放さぬ此守袋親の紀念と成又爺様の景圖書其外に加賀國俱利加羅不動の尊像水難火難を通あらたな尊像夫が誠の爺様の紀念でムす此守を見て下さり升せ(無)白倉が娘では無とな(糸)證據は此守ト出さふとする處を(岡)娘糸萩娘(無)上るリ「聲に驚き兩人は母の手前は何氣のふ素知ぬ躰に岡の谷も奥の一ト間を立出て○夫トの言付御酒上りたか(糸)笹は御嫌じやといな(岡)御嫌でも此母が御進申さぬば成らぬ(無)拙者一吸も酒は得給升ぬ平に御無用にして被下(岡)折角の志御酒は御氣根腰元共銚子持て「ハツト答て腰元共銚子盃持て直すれば○誰彼と言より糸萩其方が一ツ呑で慮外申しや(糸)でも夫は餘り(岡)大事ムらぬ酌し升ふ其盃をちやと何方へ上ケ升しやいのふ(糸)夫でもどふやら(岡)埒の明ぬ取次致升ふ(無)酒は氣根に仕早く納被下(岡)是は又氣の短ト傳之丞出(傳之)旅行の御勞湯風呂へ召て御休被成升と親共申付(無)是は忝無し御夫婦御入の跡御無心を申(傳之)親共何がなど存新造の湯風呂新成處が御馳走御入被下(岡)今日が始て清らかな處が御馳走お入被成升せ(無)御進辭退は却て無禮御無心中(糸)嗅様私が御案内致升ふト誂の哥返し本舞臺高欄付廊下上手一間四方箱風呂此前刀掛釣衣桁有道具留るト無三四糸萩浴衣持出(糸)是が風呂場でムり升ト刀脇差刀掛へ懸浴衣を着る○加減を些ト熱い誰ぞ水を(無)手前熱湯能ムるト風呂へ行を(糸)申最前は邪广が入御目に懸なんだ幸人目もなし是此守の内に爺様

の景圖書又加賀の國俱利加羅不動の尊像如何成火難水難も遁るゐらたな尊像私が身に凶事無様にと爺様の紀念でムすト守を見せ(無)俱利加羅不動の尊像は佐々木家の念誦佛其守を所持致は合點行ずどれト守を明様とする(林)夫を見せては上るリ「其守をと林左衛門取手を拂ふ宮本が遣らじと取ば争拍子守は飛で風呂の内是はと言ふ間に宮本は風呂へさんぶと飛込だりト風呂の戸をさす小蔭より源藏萬右衛門專之介内匠佐十郎出扉へ大釘を打込(糸)夫や何被成升大事のお客鹿相被成なト風呂へ行を傳五右衛門出(傳)何も我構事は無控て居よト呵付る皆く釘打て(皆)先生首尾能(傳)コレ家來に申付柴薪を以下を焚立大釜の熱湯付込せ由斷無様御指圖被下(林)畏てムり升「皆く打連て馳り行(糸)申爺様門弟衆の今の形勢御前の御詞合點が行ぬ(傳)熱湯の中で赤き死(糸)何恨有て何の科で(傳)拒癪な尋立故有て生ては置れぬ女の知た事で無い(糸)意趣意恨有ば尋常に勝負は被成いで比興未練な御も無風呂で焚殺とは餘そうじや戸を破つて御助申さん(傳)うぬはあの二才めにうつ惚たな(糸)惚た斗じや無昨日一の宮で林左衛門殿が無躰の戀慕既に殺被る所あの御方のお情で命の之恩警親に背ても御命助ひで置ふか「振切く馳行糸裁遣らじと止むる白倉が大力に支被あせる娘を呼吸の當(傳)下部共云付し柴薪庭先に運べく「ハット答て下部共てん手に擔ふ柴薪拍子の懸聲エィくサアサツサア白倉下知して「暫時が間に廣庭に柴の山をぞなしにけり(傳)此上は出口へ廻て何角の駈引夫「大膽不敵の白倉は裏道差て急行跡に糸裁

氣も狂亂(糸)どふそ何方の御命助たい物じやが此風呂の丈夫な事仕様は無い事か「あせれど如何な明ぬ戸に早浦返る湯氣の音内には苦咽ぶ聲○最湯が煎るそうな夫が手留物かいナア此戸がどふぞ破りたい御命が助たい「言へど女の言甲斐も泣より外の事ぞ無歎きの内に心付○夫よ佐々木家の念誦佛俱利加羅不動の尊像所持すれば縦へ火煙の中に苦共其身に過無と聞御利生正に不違が無三四様の御身に凶事無様ふ南無俱利加羅不動明王く「念力疑て祈けるそうじや裏へ廻て湯口の栓を扱が近道そうじやト傳之丞出(傳之)そふはさゝぬト兩人立廻傳之丞に手桶を被せ見事に投「女心の一筋に裏道差てぞト返し舞臺風呂の裏手に成柴積重火燃家來大勢四斗樽にて熱湯を湯口へ入れ萬右衛門出て(萬)何れも無三四最早相果しと思の外風呂の前敷外し候様に相見得升(傳)其儘には置れぬ何れも御出被下(林)熱湯の中居つて死ぬとは(源)體は鐵でも湯に成のに合點行ぬ奴(皆)ヤアく是は風呂を碎音(傳)此上は長柄を持って突伏升ふ(皆)心得升たト大ばたく返し舞臺元へ戻す風呂向碎有無三四柱を取上體顔共眞赤に成浴衣形大童にて家來大勢門弟不殘長柄にて取巻道具留る上るリ「走行座敷續の大湯殿計に計る白倉が工に陷宮本が湯氣に苦む形勢は目も被當ぬ風せいなり俱利加羅不動佛身宮本に寫らせ給ふ風呂の内滅りく挫やり粉な微塵敷居鴨居も踏碎き飛で出たる無三四が勇猛恐しなんとも愚か成ト宮本抱身眞赤にて風呂の鴨居を振上(皆)そりや「夫りやと懸聲大勢が中に一人血氣の無三四シャ拒癪など渡り合手練殿敷

働は目覺しかりける次第成ト床の合方大勢の門弟を相手に柱にて皆くを打伏せる傳五右衛門刀を抜切懸る(無)當の敵は白倉傳五右衛門己さ(討殺は本望觀念せよ(傳)死害いの宮本生ては置ぬ覺期く上り)生ては置ぬと切懸を合點と云原に風呂敷居を提て二打三打戦しが差者白倉忍兼遊足出て逃行を横擲裕を懸て打擲かんぎやつ共すう共云間無目を白倉が最後成ト白倉を討殺後え岡の谷長刀を持出(岡)夫トの敵覺期しや「夫トの敵と立寄を體を挫やり雷打微塵に成て死でけりト傳之丞刀を拔出(傳之)親の敵「討て懸るをしほらしやと大手を開け引抓一振々て打付れば叶はじ物と起上る脊骨へ睨片足の引導其儘息は絶にけり「相手なければ宮本無三四油斷難成しと邊を見廻し岡の谷が腰に有合ひしとき引解て我身の脩刀替と睨と引べ此隙にと駈出す後ろへ(糸)無三四あなたの大小ト二腰を出す(無)糸袂不動の御利生承知致た(糸)所詮被添ぬ惡縁未來はどうぞト自害する(無)出かした此守そちが筐未來は夫婦半座を分て待て居れ(糸)忝ひ(無)南無阿彌陀佛ト一寸愁ひ此内萬右衛門内匠出被切林左衛門無三四に付て這入返し本舞臺淺黄幕切落す橋懸より仲間侍大勢素鍔竹鍔持出(○)是は本間九郎様の御家中(□)佐々田喜右衛門様の御家來何と騒動でムらぬか(○)白倉の邸に一人も助た者はムらぬ(□)兵法の先生も當に成升ぬ暴動者を討取と主人の仰(○)此方迎其通(□○)皆御來やれくト返し本舞臺奥深に敵二重に草土手笹垣切抜林左衛門類冠出(皆く)夫や暴動者(林)間違じや己じやくト林左散々に突立被切拂此内無三四

下手の竹よりふらくに成出て行懸林左を突伏無三四花道中程迄來る(○)爰に居共不知爰へ出たは(無)味ひ手違(皆く)いかい阿房のト兩方より林左を引上る(無)至極上首尾(大勢)南無阿彌陀佛ト死體を叩き倒す是をとたんに無三四胸撫下すとチヨンく頭を入るト
五敷幕

明治廿七年十月三十日印刷
明治廿七年十一月二日發行

(定價金拾錢)

版權興行所
版權興行所

著者相續者
兼發行者

印刷者

印刷所

著作者故並木五瓶男

並木善次郎

京橋區築地壹丁目二十三番地

山本鉄次郎

京橋區西紺屋町廿六七番地
秀英舍令員

株式會社 秀英舍

京橋區西紺屋町廿六七番地

